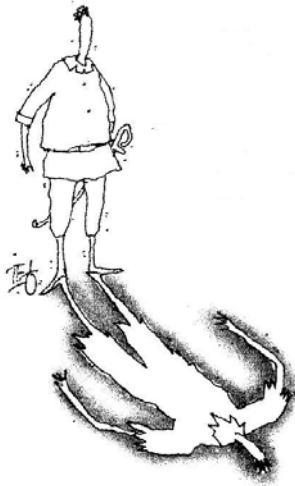


王子と乞食

第2編13章

キリストは人間の肉体の真の本質をとられた。



聖書はたくさんの箇所です。キリストが本当に私たちと全く同じ弱い体をとられたことを証言しています(参照、ヨハネ第一1:12)。キリストは血と肉を備えられた方で(ヘブライ2:14、16) 私たちを自分の兄弟と呼ばれ(ヘブライ2:11、17) 私たちの弱さに同情できる大祭司(ヘブライ4:15)であられるのです。

アメリカの優れた作家マーク・トゥエイン(Mark Twain、1835-1910)の小説「王子と乞食」をご存知でしょうか? 子供でさえも一気に読まずにはおれないほどおもしろい作品です。

ある日、王子エドワードは王宮の門の外で近衛兵にこづきまわされている一人の乞食の少年と出会います。王子はその乞食を宮殿の中に招き入れます。そこで彼は自分とその乞食の少年の顔があまりにも似ているのに驚くのです。好奇心にかられた王子と乞食は互いに服を交換し合います。そして、そこから二人の運命が変わるのです。

王子は乞食となって宮殿の外に追い出され、乞食の少年は王子の役割をしなければならなくなります。乞食になった王子はそこで虐待や蔑視、そして様々な危険を経験します。しかし、最後に乞食になって王子は自分の宮殿に戻ることに成功し、英国の王として即位するのです。たいへんおもしろい物語です。もしかしたらマーク・トゥエインはこの小説のヒントを聖書から得たのかもしれない。天の王座を捨ててこの地上に来られ、僕の姿を取られたキリストについての聖書の記述から...

第1節 キリストが人の体を取られて来られたことを否定する異端者たちが存在する。

むかしの時代でもバーチャルリアリティー(仮想的現実)と実際の現実の世界を区別できない人たちが存在したようです。キリストは実際に人の体を取られて来られたのではなく、そのように見えただけだと言うのです。彼らは聖なる神がどうして汚れた人間の体を取ることが出来るのかと主張するのです。もしそうだとすると、それは一時的なかりそめの姿で、十字架にかけられたときまでその体を借りたにすぎないと言うのです。私たちはこのように主張をする人々をドク

ティズム (Docetism) 論者と呼んでいます。彼らは後になってアウグスチヌスからもその見解を激しく攻撃されています。

紀元 150 年頃ローマで教えていたマルキオンの追従者たちは、キリストは肉体を取られたのではなく、幻影を取られたのだと主張しました。紀元 227 年頃に死亡したマニ (ペルシャ人) とその仲間の異端者たちは、キリストは天の肉体を取られたと空想しました。その後マルキオン派の流れに属するメノー・シモン (1496-1561 年、後にオランダの再洗礼派を再建した) もその過ちを繰り返し主張しました。

このようなすべての思想はみなグノーシス主義 (Gnosticism、靈知主義) から出てきたものです。グノーシス主義は物質を絶対的な悪と見なし、霊を善と考える二元論に立っています。ですからグノーシス主義者たちから見るなら旧約の神は真の神ではないのです。真の神が悪しき物質を創造されることはないからです。旧約の神は (Demiurgos) は真の神から派生した序列 30 番に該当する神 (Aeon) で、低級な神だと主張するのです。

彼らはその一方でキリストにあって示された新約の神は真の神であると語ります。キリストは真の神を世に知らせるためにこの地上に派遣された特使だと言うのです。従って、キリストも汚れた人間の体を取られるはずがないと言うのです。しばしの間、十字架の出来事が起こるまでだけその人間の体 (実際の人間) を借り受けただけで、弟子たちが見たキリストは幻影だったと言うのです。

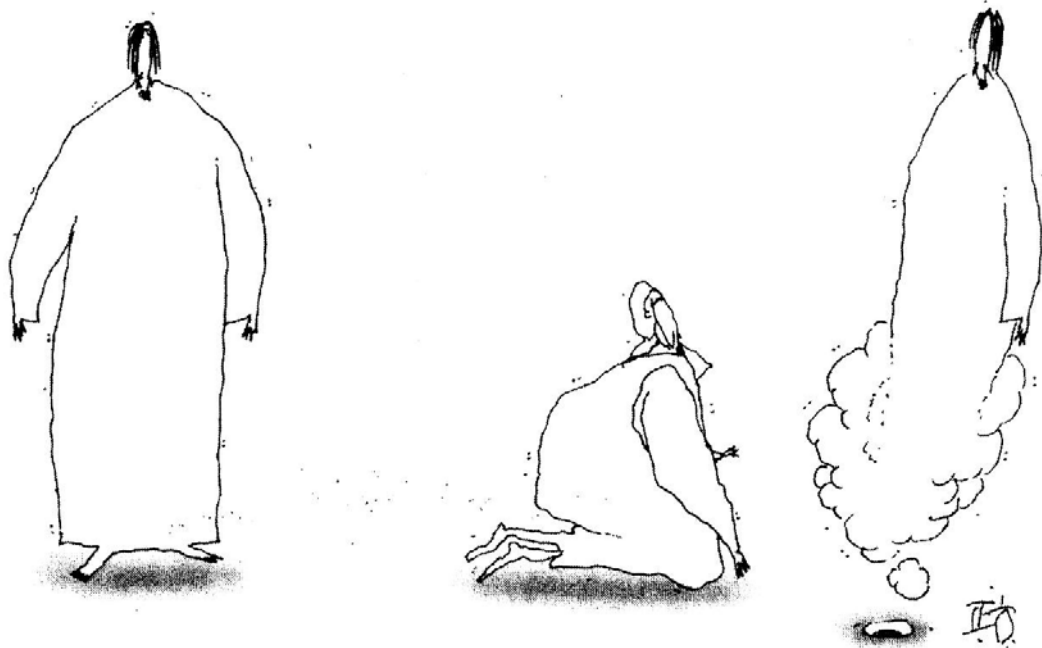
彼らの主張が作り出す創作力はこのようなものです。しかしキリストは実際に人の体を取ってこられなかったとするならば、当然キリストが死んだことも復活されたことも偽りになってしまいます。驚きです。実際にこのような見解に立つ者たちはそのようにも語り、キリストの死と復活を否定するのです。彼らは聖書を最初から最後までもう一度書き換えたいのです。ですから聖書は彼らを反キリストと呼んでいるのです (ヨハネ第一 4:2, 3; ヨハネ第二 7 節; コロサイ 2:8, 9)。

第 2 節 異端者たちの汚らわしい詭弁は虚しいものです。

まず彼らのキリストの体は天に属する体 (マニはコリント第一 15 章 47, 48 節を根拠にそのように主張しました) であるという言葉について考えてみましょう。キリストの体は空気の体だと言うのです。しかし、神は空気で作られた人ではなくアブラハムとヤコブの子孫と祝福の契約を結ばれました (創世 12:3, 17:2, 18:18, 22:18, 26:4) 空中の人ではなくダビデの子孫に永遠の王位を約束されたのです (詩 45:6, 132:11)。

ですからキリストは肉の血統ではアブラハムとダビデの子孫としてこの地上に来られたのです (マタイ 1:1, ローマ 1:3)。キリスト自身もご自分が人として来られたことを強調されるために自分をたびたび人間 (人の子) と呼ばれています (参照、マタイ 8:20, 9:6, 12:40, 16:27; 詩 8:4; ヘブライ 2:6, 14)。さらにマニが誤解したコリント第一のその箇所はキリストの体が天に属する何らかのものだと言っているのではなく、私たちが甦らせてくださる霊的な力を強調する部分なのです。

コリント第一の 15 章の本文全体が声高らかに訴えているものは何でしょうか? 私たちのような人間の本性を持たれたキリストの体が復活したように私たちも同じように復活することができる希望 (コリント第一 15:12-20) が示されたという点です。ですからもしキリストの体と私たち



の体が全く違ったものであるなら、その希望は虚しいものになってしまうはずだ。

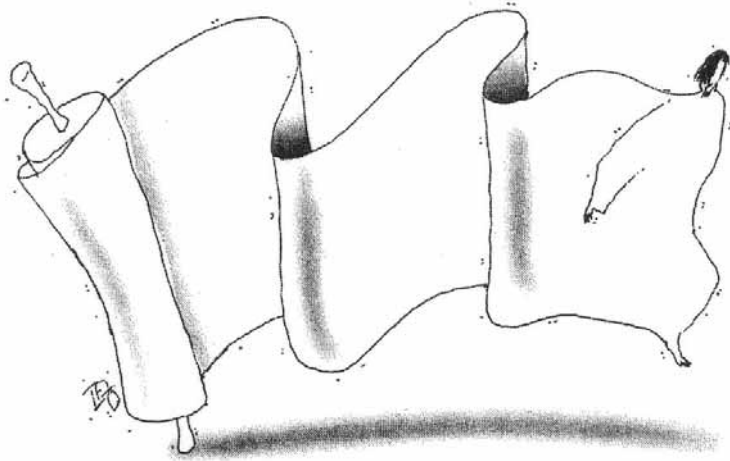
また、これと同じ妄想は「キリストの体は幻影にすぎない」というものです（マルキオン）。しかし、聖書はたくさんの箇所ですべてキリストが本当に私たちと全く同じ弱い体をとられたことを証言しています（参照、ヨハネ第一 1:1, 2）。キリストは血と肉を備えられた方で（ヘブライ 2:14, 16）私たちが自分の兄弟と呼ばれ（ヘブライ 2:11, 17）私たちの弱さに同情できる大祭司（ヘブライ 4:15）であられるのです。パウロの主張のように世の罪は私たちと全く同じ肉体を取られた者だけが取り除くことができるのです（ローマ 8:3）。

キリストがこのように完璧に私たちと同じになられた点から確信できることが一つあります。それは父なる神が人として来られたキリストに与えられたものすべては私たちのものでもあると言う祝福です。私たちはこの希望をしっかりと把握していなければなりません。それはキリストをこの地上に人として遣わされた神の計画にあるもう一つの重要な目的ではないでしょうか。

あの有名な聖書の箇所、フィリピ 2 章 5 から 7 節のみ言葉にもキリストは私たちに謙遜と従順の道を教えられるために自分の神性をしばらくの間、肉体に覆われることを許されたと言っています。「自分を無にした」と言う言葉は神であることを捨てられたという意味ではなく、神としての栄光がしばらくの間僕の間僕に隠されることを許されたという意味です。ですからキリストが私たちと全く同じ体をとられたと言わなければこの文章の説明はできないのです。

また「高く挙げられた」という表現もそうです。彼が私たちと全く同じ体を取らなかったとしたら、高く挙げられる必要もありませんでした。また、彼らはキリストによって私たちがキリストと共に一つの兄弟になる（ヘブライ 2:11）という言葉にもけちをつけています。そうだとすれば信仰者でなくてもすべての人がキリストの兄弟になるのではないかと言うのです。

しかし、神の子たちは血統から生まれるのではなく、ただ信仰によって、霊から生まれるのです（ヨハネ 1:13）。キリストは私たちが神の子とされるために人となられたと語るとき、その言葉



がすべての人間、誰も彼もがそうであると言っているのではないことは明らかです。また、彼らは「キリストが長子となられた」という表現についても聖書に逆らいます。キリストが兄弟の中の長子となられたのならば（ローマ 8:29）、キリストはまず最初にアダムに先立って生まれなければならないと

言うのです。しかし、ここで語られている言葉は年齢に関するものではありません。それはキリストがご自分の持つ榮譽のすばらしさと崇高な権能で一番となれたことを意味しているのです。

今まで調べたような彼らの強引な主張は創世記3章15節の約束だけでも考えて見るならばすぐに解決するものです。その約束は神がエデンの園から追放されようとする女に彼女が絶望に陥らないようにとすばらしい希望の贈り物を与えられたもので、キリストとすべての人類に関することです。その約束にはキリストは人を救うために人間から生まれると語られているのです。

第3節 処女マリアの系図は異端者たちの反論の根拠のなさを暴露します。

異端者たちはアブラハムの種という言葉とダビデの子孫と言う言葉がすべて寓喩(アレゴリー)的な表現であると語ります。しかしそれは本当に邪悪で憎むべき主張です。パウロはキリストをダビデの子と呼ぶ前に「肉によれば」という言葉を付け加えています（ローマ 9:5）。それはキリストの人間性を語っているのではないのでしょうか？また、その胎内の子（ルカ 1:42）あなたの身から出る（詩 132:11；サムエル下 7:12；使徒 2:30）とはどんな意味でしょうか？

さらに彼らはマタイがマリアの系図ではなくヨセフの系図を記録している点を上げて可能ならばキリストの歴史性を否定しようとしています。キリストはヨセフと関係がなく、マリアの体から生まれたため、ヨセフの系図は何の助けにもならないと言うのです。しかし当時、すでにヨセフとマリアは同じ家系から出た者であることが広く知られていたためにマタイはヨセフの系図を示すだけで十分であったと言えるのです。

とにかくマリアの名前は出てはきませんが、彼女の家系に関するヨセフの系図を遡っていくこと、マリアが直接天使から受胎の知らせを聞いた時にその子がダビデの王座につくと表現されていること、そしてすでにキリストがダビデの子孫として来られることと彼が処女の体から生まれると言う（参照、イザヤ 7:14）預言の言葉などは彼ら異端者の悪辣な想像力を辱めるに余りあるものと言えるのです。

ですからキリストは預言された通りに処女の体を通してこの地上に生まれ、ダビデの子孫となられたのです。ところが彼らはまたここで幼稚なことを考え出します。女の体から生まれたキリストに罪がないとするならば、女の種は不潔ではなく、男の種だけが不潔なのだと言うのです。しかし、私たちが処女の体を通して生まれたキリストに何の罪もなかったと言うときは男と関係

しない女から生まれたからではなく、聖なる聖霊の力によってアダムの墮落から守られ、聖く汚れのない状態で生まれられたと言う意味なのです。

聖書がキリストの聖さを強調するときそれは常に彼の神性からではなくて、人間性から語っていることを覚えるべきです（ヨハネ 17:19）。なぜなら神についてなら潔さを語る必要は全くなからず。彼らはもう一つ、み言葉が肉体となられたならば神が地上の体という狭い監獄に繋がれたことになるのではないかと語ります。しかしキリストはただの一度も神であられることをやめられたことはありません。自ら処女の胎内におられ、この地上にとどまり、十字架にかけられました。同時に永遠の昔からそうであったように全宇宙に満ちたお方だったのです。

まとめ

キリストは乞食となられた王子です。天の王座を捨てて、卑しい僕の体を取り、この地上に來られました。キリストが人の体で私たちのところに来られたことを否認する者たちはすべて反キリストです。彼らはすべての物質と肉を悪と見なし、霊を聖なるものと見なすグノーシス主義の二元論に従っている弟子たちです。彼らは自分たちのその偽りの哲学で聖書の真理を切り貼りする虚しい労苦を続けています。ですから、知れば知るほど彼らは哀れな者たちと言えるのです。